

講談「田辺城籠城の一席」 古今伝授ノ編

この脚本は、平成四年創生一億円事業により田辺城大手門の完成を祝うイベントとして、「第一回まいづる田辺城まつり」が開催されたおり、前夜祭の目玉イベントの講談用に田辺城籠城の史実を基に創ったものです。

田辺城籠城は、関ヶ原の合戦を左右した戦いであった。そして、武家社会のなかで忘れられていた天皇と公卿の意地を示した戦いであったかもしれない。

三成 大坂にて挙兵 ガラシヤ 人質拒み自害
一万五千の兵 田辺に進軍 迎え撃つは 兵五百余

幽齋は、田辺城籠城を決意
その時 朝廷が動く 古今伝授とは、

■第一幕 起（たつ）

語り 時は、慶長五年、西暦一六〇〇年、七月末この丹後の国において、この後おこる関ヶ原の戦いを左右する戦いが繰り広げられました。

七月十八日 早朝、宮津城に飛脚が おお慌てで駆け込んできました。

城代 「大殿！大殿！一大事ですぞ！」

幽齋 「何事じゃ、朝から騒々しい。」

城代 「石田三成殿が、家康殿を討つと兵をあげ 家康殿に味方する大名の奥方を人質にしようとした動きがあったようです。

我が奥方様は、人質を拒まれ、館に火を放ちご自害なされました。また、細川一族を成敗せよと、大名達に書状が回ったようです。」

幽齋 「それは真か。」

■第二幕 集（あつまる）

幽齋 「三成勢が攻めてまいる。

残っている兵は少ないが、勇敢にたちむかおうぞ。

よいか、急いで国中の戦道具を田辺の城に集めるのじゃ！

宮津、久美、峰山の城は、敵に渡さぬよう焼いてしまえ！
田辺の城を守りぬくのじゃ！」

語り 幽齋は、戦船で田辺にむかい、籠城の支度に取りかかります。

城下の桂林寺の住職大溪と瑞光寺の住職明聖などのお坊さんたちは、いち早く
お城に駆けつけます。

幽齋 おおいに喜び

「おお、よくぞ来てくれた！

心強く思うぞ。

この度の籠城、決死の覚悟じゃ！」

語り そのほか百姓、郷士、町人も集まり、

百姓 「我らも手伝います。なんなりと御用を仰せ付け下さい。」

語り と願い出たのです。

宮津、峰山の藩士を含めその数はわずか、五百。

鉄砲、大筒が轟き激しい戦いが始まったのです。

■第三幕 散（ちる）

語り 「さて、話を戻し、一六〇〇年、六月はじめ、家康は、

家康 「会津の上杉は、何やら謀反を企んでおるようじや。

上杉を征伐するぞ！皆のものつづけ！」

語り と上杉征伐の号令をかけ、そして参加する大名には、

家康 「よいか、家族は大坂に残し、大坂方に忠義を示すのじやぞ。」

語り これは、家族をとって三成方に味方するか、家康に忠誠を誓うか、

踏み絵を迫るものでした。

この時、忠興は、ガラシヤに

忠興 「よいか、たま。絶対に屋敷を出るでないぞ。

三成の人質になつてはいかん。」

語り と、きびしく言い渡し、出陣したのです。

七月十七日 石田三成がとうとう兵をあげ、ただちに会津征伐に出陣した大名の屋敷に、人質を取りにむかったのです。

大坂玉造の細川屋敷にも兵が押し寄せ、ガラシヤを人質にせんとする。

ガラシヤ居ずまいを正し、家老の小笠原少齋に向かい、

ガラシヤ 「少齋、わらわは、殿に人質になるな、自害せよ、と言ひ渡されております。

しかし、キリストの洗礼をうけているわらわは、自害することを許されておりました。そちは、殿にこの様な時 いかがするか聞いておろう。」

歌読み手 「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の

花も花なれ 人も人なれ」

少齋 「奥方様・・・御免。」

語り と声をかけると、なぎなたでガラシヤの胸を突き、屋敷に火を放ち、自分自身も自害して果てたのです。

この火は、京都からも見て取れるほど すごいものでありました。
この時、ガラシヤは、三十八歳。聡明な美しさで知られたガラシヤの
壮絶な死でありました。

■第四幕 煩（わづらい）

語り 場面は、宮中の一室 後陽成天皇は、弟八条宮と相向かい

後陽成天皇

「八条宮よ。幽斎はいかがしておるかの・・・。」

「一万五千の兵に囲まれ窮地にたっておりるのであろうな。」

八条宮

「はっ。城を守るは五百ほどの兵と聞いております。

仔細は今、調べております。」

後陽成天皇

「なにをゆるりと構えておるのじゃ。そちはわかっておるのか。

幽斎は、和歌の奥義を伝える唯一の者ぞ。

幽斎討死とでもなれば、和歌に込められたその時代の人情や風俗などの歴史が全て消えてしまうのだぞ。」

八条宮

「急ぎ家臣を遣わし和睦を勧めます。」

語り

宮邸にて八条宮は、家臣の家老「大石甚助」に命令

八条宮

「よいか甚助。何としても幽斎に敵との和睦をのませるのじゃ。

兄ぎみ天皇様のご心配を思うと、この任、命がけぞ。そちの覚悟いかが！」

大石甚助

「ははっ。身命に替えても成し遂げてみせます。」

■第五幕 使（つかい）

語り

場面は、田辺城へ

四方を敵に囲まれた田辺城へ天皇の勅使として派遣された大石甚助、果たして幽齋に和睦を飲ませることができるのか？
田辺城を囲む西軍に対し大石甚助は、

大石甚助

「戦いは、しばし待たれい！」

「われは、勅使成るぞ！」

「後陽成天皇様よりの使者でござる。幽齋殿にお目道理いたす。その間、戦することまかりならん！」

語り

これを受け、幽齋に伝令がひた走る。

城内伝令

「殿、ただ今、城門前に勅使が参っており 殿にお目道理を願っております。いかが致しましょう。」

幽齋

「勅使とあらば断ること かなうまい。」

「門を開け丁重におもてなし致せ。そうじゃ！」

庭園の松の下に場を設け 案いいたせ。」

■第六幕 伝（つたえる）

意（

語り

場面は、庭園 松の下

大石甚助

「後陽成天皇様の勅使としてまかり越しました八条宮様の家老「大石甚助」でございます。」

幽齋

「天皇様、八条宮様は、ご健勝か？」

大石甚助

「ははっ。」

語り

幽齋、わざととぼけて

幽齋

「さて、そちは何しにこの砲火の飛び交う中にこられたのかな？」

大石甚助

「天皇様、宮様におかれましては、御身おんみを心配し、和睦を成さんとほつしておられます。ここに勅旨たまわを賜れんことお願い申し上げます。」

幽齋

「勅旨つしとな。謹つしんでご拝見はいけんいたし申そう。」

語り

甚助から勅旨うやうやしくを恭しく頂いた幽齋は、一読し、

幽齋

「天皇様のお心遣い誠に身に余る有難ありがたい事にござります。」

しかしながら我は、和わを乞こうて城を明け渡すのは、武士の本意ほんいにあらず
と思うております。」

「どうか天皇様によりしくお伝え願いたい。」

(すこし間をあけて「少し考えるようなそぶり」)

「天皇様に献上けんじょうしたいものがござればしばしお待ちください。」

「庭の松の下でゆるりとお待ちあれ。」

語り

幽齋は、庭の松の下で待つ甚助の前に用意していた木箱を差し出した。

大石甚助

「これは？」

幽齋

「天皇様に献上致したく用意していたものでござる。」

語り

甚助、木箱のふたを開ける。そこには、書き物が入っていた。

幽齋

「歌道のことを考え、古今伝授の箱、源氏抄箱げんじしょう、二十一代集と古今伝授の証明状を宮中へ献上申し上げます。さらに和歌をしたためましたのでお渡し願いたい。」

語り

甚助 和歌が書かれた短冊たんざくをおしいだき読み上げる。

歌読み手

「いにしえも今もかわらぬ世の中に、こころの種を残す言ことの葉」

繰り返す

語り

和歌の弟子「烏丸光広卿」へは、次の和歌を送りました。

歌読み手

「もしほ草かきあつめたる跡とめて 昔にかへる和歌のうら波」
繰り返す

■第七幕 拒（こばむ）

語り

宮中へ戻った甚助から幽斎の決死の覚悟を聞かれ、後陽成天皇は、

後陽成天皇

「むく……。今一度 幽斎の弟「大徳寺の玉甫和尚」に幽斎を説得するよう依頼いたせ！」

語り

和睦の依頼を受け玉甫和尚は、

玉甫和尚

「越中守忠興は関東へ出陣しております。」

留守をあずかる幽斎は家康への忠誠をしめすため、討ち死する覚悟と存じます。兄をいくら説得しても無駄と存じます。」

語り

幽斎の覚悟をしる弟の玉甫和尚は、天皇の依頼を辞退しました。

宮中は、それでも今一度、天皇様の御心を伝えようと大坂の前田徳善院源以に幽斎の説得を命じましたが、幽斎はこれも断ります。

■第八幕 開（ひらく）

語り

困り果てた天皇様は、九月三日、遂に宮中の重職で幽斎の和歌の高弟でもある三条大納言実条、中院中納言通勝、烏丸中将光広を使者として遣わします。

語り

田辺城を囲む攻めての軍に対して勅使「三条大納言実条」は

三条大納言実条

「幽齋は、文武の達人にて、ことに古今伝授を伝える帝王の御師範である。いま、幽齋が命おとさば、世にこれを伝うるものなし。速やかに囲いをとくべし！」

語り ひれ伏した包围軍は、囲いをとぎ、勅使は城内へ入り幽齋へ天皇様の和睦のお言葉を伝えたのです。幽齋は、

幽齋 「勅使三度におよんだ勅命である。その御心これ以上粗末そまつに扱うこと出来申さん。門を開けよ！」

語り ついに幽齋は、城を開けました。

そして、籠城の面々をねぎらい、屋敷を焼いた者には、材木を与えるなど気を配りました。

語り 九月十三日、幽齋は、あとの始末をつけると 城を前田徳善とくぜんの子主善しゅぜんに渡して主善の亀山城へ移ったのでした。

その二日後、天下分け目の関ヶ原の戦いが行われ徳川東軍が勝利をおさめたのです。

つまり、あと三日持ちこたえればとは、後になって言えること。

誠に惜おしい！

■第九幕 境（わかれめ）

語り この田辺籠城の重みおもを一番しっていたのは 徳川家康でした。

家康 「関が原の戦いに この田辺籠城の西軍一万五千が加わっていたなら歴史が変わっていたかもしれんな。危ないところであったわい。」

語り 九月二十一日、亀山の幽齋のもとに家康から石田三成を捕らえたとの報しらせが届とどきます。幽齋は、豊臣とよとみの時代が終わったことをしみじみ感かんじたのでした。

■第十幕 授（さずける）

語り

十月、関が原の合戦によって、天下は徳川のものとなりました。

その翌年、幽齋は、後陽成天皇の皇弟仁智親王八条宮に古今伝授し、さらに二年後に歌道の弟子・烏丸光広にも古今伝授しています。

語り

古今伝授というのは、歌道の奥義を伝授する最高の行事です。

これは、一四七〇年頃、濃州のうしゅうの東下野守とうのしもつけのかみ平常縁たいらのつねよりに始まり、

紀州の種玉庵宗祇しゅぎやくあんそうぎに伝え、三条大納言実隆さんねだかを経て知恩院公国卿ちおんいんきみくにのきょうへ伝えられました。

公国卿きみくにのきょうは重病で、その子の実条さねえだが幼少であったため、幽齋へ伝えられたものです。

幽齋は、これを開城の前、城中で、成長した三条大納言実条だいなごんさねえだに古今伝授を行ったのです。

田辺籠城は、まさに、武を制した古今伝授、文の力でした。

完